李　白

李　白

田中克己

世界名詩選

筑摩書房

昭和三十年三月十日　初版發行
昭和三十二年四月十日　再版發行

李白
定價三〇〇圓

著者　田中克己
發行者　古田晁
印刷者　中内佐光
東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所　株式會社　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話（29）七六五一（代表）一四
振替東京一六五七六八

曉印刷株式會社印刷・高陽堂製本

李　白

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

秋浦歌

秋浦長似秋
蕭條使人愁
客愁不可度
行上東大樓
正西望長安
下見江水流
寄言向江水
汝意憶儂不
遙傳一掬淚
爲我達揚州。

秋浦の歌

秋浦つねに秋に似たり
蕭條（セウデウ）　人をしてうれへしむ。
客愁（カクシウ）すくふべからず
行いてのぼる東大樓。
正西に長安を望み
下に江水の流るるを見る。
言を寄せて江水に向ふ
汝がこころわれを憶ふやいなや。
遙かに一掬（イッキク）の涙を傳ふ
わがために揚州（ヤウシウ）に達せよと。

秋浦の歌の第一首である。

秋浦というここの土地はいつも秋のようにさびしいところだ

そのさびしさでかなしくなって來る。
たびのかなしさはすくいようもないので
東大樓に登ってみた。
ここからま西に長安の方角をながめ
またま下の揚子江の流れるのを見る。
そこで揚子江の水に向っていってみる
「おまえの心はわしをおぼえているか
もしおぼえているならとおく一すくいのわが涙をことづける
わしのためにあの揚州へとどけておくれ」と。

秋浦というのは、今の安徽(アンキ)省の貴池縣で、唐代では池州とも呼ばれた。李白はたびたびここへ往來しているが、この歌を作ったのは、たぶんその最後に近い、六十一二歳のころ、當塗縣に住んでいたころのことであろう。歌は全部で十七首であるが、みな老年の趣をあらわし、いかにも漢詩にふさわしいながら、いい作ばかりで、このあたりから李白の詩に入ってゆくのが、本當のような氣がする。ただし涙をとどけてもらうめあてになる、揚子江のまだ下流の揚州は、當時の上海とでもいうべき、繁華な大都會ながら、そこには誰がいたのだろう。もとより二三の友はあ

ったろうが、李白の青年時代の放蕩の地なので、とどけ先は強いていえば、當時の戀愛の相手だったうたひめ、もっと正確にいえば彼の「青春」がそれに當るのではないかと、私は想像してよけいこの詩が好きになる。（久保天隨博士の「李太白詩集上」の七二八頁にのせるこの詩の譯には、餘論として、「この時、李白の友の某が揚州にいたから、こう言ったので」とあるが、私とはちがう。この譯註は、よく出來ていて、ここ十年、ずいぶん愛讀させてもらったのに、最初から反對してしまって申しわけないが、散文とちがい、詩の解釋などには、こうしたことは普通なので、ゆるしていただけると思う）。

秋浦猿夜愁　　秋浦　猿よる愁ふ
黄山堪白頭　　黄山　白頭に堪へんや。
清溪非隴水　　清溪は隴水にあらざれども
翻作斷腸流　　かへつて斷腸の流をなす。
欲去不得去　　去らんと欲して去るを得ず
薄遊成久遊　　薄遊　久遊となる。
何年是歸日　　いづれの年かこれ歸るの日
雨淚下孤舟。　　涙を雨ふらして孤舟にくだる。

秋浦では猿も夜になるとかなしげに啼くので
黄山という山もしらが頭になってしまいそうだ。
清溪という川はあのかなしい音たてる隴水ではないのに
はらわたをたち切らすほどかなしい音を立てる流にかわった。
僕は去ろうとして去りえず
ちょっとの旅がながい旅になってしまった。
いつになったら歸る日となろう
雨のように涙を流しながら宿にしているひとつ舟に僕はおりてゆく。

秋浦の歌の第二である。口語譯するとハイネの失戀の詩のような感じだが、名譽を失い、前途の見えている老人の悲しみは、失戀よりもっと深いものであろう。かなしい音たてる隴水というのは、陝西省の隴山から流れ出る川で、隴頭歌という古い歌に「隴頭ノ流水、鳴聲幽咽ス。遙カニ秦川ヲ望メバ、肝腸斷絶ス」とうたわれたものである。

兩鬢入秋浦　　兩鬢（リャウビン）秋浦に入れば

一朝颯已衰　　一朝　颯（サッ）としてすでに衰ふ。
猿聲催白髪　　猿聲　白髪をもよほし
長短盡成絲。　　長短ことごとく絲をなす。

僕の兩鬢は秋浦という名の地に入ると
その名のせいかある朝もうしらがになってしまった。
猿のかなしい聲が白髪にならせたので
長いのも短いのもみんなきぬ絲のようにもつれてしまった。

第四首である。

白髪をうたった作はあとにもある。もとより秋浦に來てからはじめて、白髪になったのではないが、ここに來て、一層それを氣にしなければならないほど、氣力の衰えたのを知ったのであろう。

秋浦多白猿　　秋浦に白猿おほく
超騰若飛雪　　超騰（チョウトウ）　飛雪のごとし。
牽引條上兒　　條上の兒を牽引（ケンイン）し

飲弄水中月。　飲んで水中の月をもてあそぶ。

秋浦には白い猿が多くいて
飛んだりはねたり飛雪のようだ。
枝の上の子猿を引きつれて
谷の水を飲みながら水にうつる月影にじゃれている。

第五首である。

これは一幅の畫にすぎないが、夜ごと悲しいこえでなやませる猿の家族を、珍らしげにながめている老詩人の脳裏には、彼みずからの家族のことも往來したであろう。長男ひとりはつれて來ていたようだが、妻や他の子どもはどこにいたろう。たぶん置き去りにして來ていたことと思う。しかも世間はあいかわらずものさわがしく、それらの生活も安穏とはいえないのである。

醉上山公馬　醉うて山公の馬にのぼり
寒歌甯戚牛　こごえて甯戚(ネイセキ)の牛を歌ふ。
空吟白石爛　むなしく白石爛(あざやか)なりと吟じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

涙滿黑貂裘。　涙は黑貂(コクテウ)の裘(キウ)に滿つ。

第七首である。

李白はなぜ詩を作ったか。「詩的精神(エスプリ)に驅られて」、なるほどそうであろう。それなくして作った詩は形は何とでもあれ、詩ではない。このプリンシプルは詩を作ろうという若い人すべてに、ふだん私の說いてきかせていることである。現代ではとりわけ、それを强調する必要を感じるからである。新聞の記事の切りぬきや、どこかの宗教的信念の一こまが、詩と稱せられるこの國の現在では。

しかし李白の才能はともあれ、これに詩人となる決意をさせたのは、その生きた唐代では、詩を作れるということが、インテリの資格の一つだったからである。「唐詩選」をひもどいて見るがよい。皇帝が二人、他はみな士人の作である。この本の撰者は明の李攀龍と稱せられるが、事實は誰だか不明であり、選び出された詩にも愚作がある。この本に見える李白の詩も、必ずしも最傑作ばかりとはいえない。それはともかく、誰が唐詩を選び出したとしても、作者名簿は、この「唐詩選」とほぼ同じ樣子になったろう。かくも多くの詩人を出した時代は、詩人である私にはうれしいことだが、その理由は、官吏になる資格試驗に、作詩が課せられたこと、これが最大の理由である。しかし詩が作れれば官吏になれるといっても、官吏の卵がみな抒情的、センチメ

ンタルでなければならないというのではさらさらない。その詩には、故事來歴が引いてなければならないのである。過去を研究して、今の政治に役立てようという、歴史の研究がここにおいては、必要とされる。いまの○×式の試験より少し高等であるが、試験はやはり試験だったのである。

この詩にも從って故事來歴が引いてある。大切なのは韻よりもむしろ、この引かれた故事である。譯はそのあと自明となろう。

まず山公というのは、晉の山簡のことで、李白はその「襄陽曲」（第二）でも

山公醉酒時　　山公　酒に醉ふの時
酩酊高陽下　　酩酊す高陽のほとり。
頭上白接䍦　　頭上の白接䍦
倒著還騎馬。　　さかしまに著けてまた馬に騎る。

と歌い、荆州の知事でありながら、いつも外へ出て酒に醉い、白帽をさかさにかぶって、馬にのっているのを、時人に歌われた樣を寫している。ここでも李白はみずからの醉態を寫すために借りて來ているのだが、山簡と同じく、高潔で、世俗にかかわらない自分を、誇っている樣子があ

りありと見える。

次に宵戚は春秋時代の人で、牛の角を叩きながら、「南山矸シ、白石爛カナリ。生キテ堯ト舜トノ禪ニ逢ハズ、短布單衣裁チテ骭ニ至ル。昏ヨリ牛ニ飯ヒ夜半ニ薄ル、長夜漫々イヅレノ時カ旦ケン」と歌っているのを、齊の桓公に聞かれて、大臣にしてもらったというのである。これも、任官の志をとげ得なかった、李白の理想とするところであろう。「白石爛」と歌う第三行も、これで明らかとなった。

この詩は最後の「淚滿黑貂裘」という句ではじめて詩らしくなる。黑貂の皮ごろもといえば、材料は良いが、昔、長安の朝廷で賜った衣としても、もはやぼろぼろになっていたことであろう。淚は立身出世の夢やぶれての淚ではなく、人材を用いず、政治の亂れた朝廷を憂えての淚と考えるとき、はじめて詩人が美しいすがたをあらわして來る。實はこの黑貂の裘にも故實があって、かの戰國の蘇秦が、秦王に十度、政治上の意見を獻上したが採用されなかったとき、黑貂の裘はやぶれ、家からもち出した百斤の黃金もなくなってしまった、と「戰國策」に見えているのである。中國の詩の理解のむつかしさは、こんなところからも來ているが、私などはおかげでものしりになれるとうれしい。

秋浦千重嶺　　秋浦　千重の嶺

水車嶺最奇　　水車嶺もつとも奇なり。
天傾欲墮石　　天は傾く墮(お)ちんとするの石
水拂寄生枝。　　水は拂ふ寄生の枝。

秋浦にはいく重にも嶺が重っているが
水車嶺がもっともすぐれている。
天が傾いているかと思わせるようにおちかかりそうな石があり
その石に生えているやどり木を水は洗って流れる。

秋浦歌の第八で、これも南畫そっくりの情景である。

千千石楠樹　　千千　石楠(セキナン)の樹
萬萬女貞林　　萬萬　女貞の林。
山山白鷺滿　　山山　白鷺滿ち
淵淵白猿吟　　淵淵(カンカン)　白猿吟ず。
君莫向秋浦　　君　秋浦に向ふなかれ

猿聲碎客心。　猿聲　客心(カクシン)を碎く。

シャクナゲの木は何千もあり
ネズミモチの林も何萬本。
山々には白さぎがいっぱいおり
谷という谷では白猿が鳴いている。
君よ秋浦に行かないように
猿のなき聲が旅人の心をこなごなにしてしまうよ。

また猿の啼聲が出て來たが、そんなに悲しいのかしら。この詩は當時の音を知らない私にも、千千、萬萬、山山、淵淵とはじめに疊字がつづいているので、いかにも口調がよいのを感ぜしめる。かような疊字は、もともとうたわれるところから出て來た詩では、どこの國でも見られることなのだが、李白のつかい方は無雜作で、さすがに天才的である。

邏人横鳥道　　邏人(ラジン)　鳥道に横はり
江祖出魚梁　　江祖　魚梁(ギョリャウ)を出づ。

水急客舟疾　　水急にして客舟はやく
山花拂面香。　　山花　面を拂うてかんばし。

邏人磯という岩礁はそびえ立って鳥の通い道をさえぎり
江祖石はやなのかけてあるあたりで水から出ている。
流れが急で旅人の舟は早くゆき
岸の山花はその顔を撫でていいにおいをさせる。

邏人磯というのは、見あたらないから、羅叉磯のまちがいだろう、と王琦は註している。この詩はただの風景描寫でなく、最後の句で流れる水の速度をさえも感じさせる。

淥水淨素月　　淥水に素月淨く
月明白鷺飛　　月明に白鷺飛ぶ。
郎聽採菱女　　郎は聽く菱を採るの女
一道夜歌歸。　　一道　夜歌して歸るを。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.